

分析全般、環境分析と幅広いものであった。この背景は、今回の中国の参加者の多くは帰国して教授になった元日本留学生であり、旧交を深め、新たな協力関係を再構築する良い機会を提供するという目的と、保母委員長の退官記念であり、GC懇のコミュニケーション（飲みにケーション？）重視の研究会の方針に沿った形で実行委員がプログラムを組み立てたことにある。今回は予想以上の参加者が集まり、3日間の会期中に中国へ帰国した先生方や韓国の先生方との交流も図れ、今後の発展につながる大変有意義な研究会になった。また、運営を支える日本企業の協力もあり、特に島津製作所北京事務所からは多大な協力を得た。10月のこの季節の北京は過ごしやすく、見聞を広めるにもってこいの時期である。参加者一同、大いに見聞を深め、また2008年北京オリンピックに向けて変貌を遂げていく中国の活気を感じ、食を楽しみ成功裏に終了した。

参加者の方々の協力に感謝し、今後の日中韓の協力関係を継続していくことを約し解散した。次回2005年は、日本で東京コンファレンスの一環として行われる予定である。さらに多くの参加を期待している。

〔日本側事務局、GC研究懇談会 前田恒昭〕

### 第326回高分子分析研究懇談会

標記例会が1月13日（木）、簡易保険会館「ゆうぼうと」で開催された。講演2題とワークショップ2題、計4件の発表があった。各講師の熱の入った発表と、50名を超える出席者の活発な質疑のために、時間が足りなくなるほどの盛況であった。

最初の講演は、加藤 淳氏（日産アーク）による「マイクロからナノメートル領域にわたる高分子の分析事例」と題する発表。オリジナル技術である「N-ARC法」を用いた成形物の樹脂流れ観察のほか、光学顕微鏡、SEM、TEM、3D-TEM、SPM、FT-IR、Raman、XPS等を用いたゴム・樹脂の分析事例が数多く紹介された。非常に盛りだくさんの内容を簡潔に解説していただき、各自の分析研究へ応用する場合や、分析の依頼相談をする場合に非常に役に立つ情報を得ることができた。

ワークショップの1件目は、香川信之氏（東ソー）の「スニッフィングGC法を用いた臭気成分の分析」であった。一般的な機器分析では評価が困難な場合が多い「におい」について、機器分析（分離同定に優れる）と人間による官能測定（検知能に優れる）の長所を組み合わせた興味深い分析法とその分析例の紹介。市販ポリエチレンでは臭気が判定されなかったのに対し、廃ポリエチレンでは約10種の臭気が判定され、その臭気成分として酪酸、吉草酸等の化合物が同定された。各種材料、香料分析等に広く応用できそうな有効な分析手法であると感じた。

ワークショップの2件目は、堤内 要氏（中部大学）の「ESI-MSを用いた食品中アクリルアミドに関する研究」の発表であった。2002年に加工食品中に神経毒であり発がん性物質でもあるアクリルアミド（AA）の存在が判明し、対策が急がれている。このAAおよび食品中でAA生成にかかわるアスパラギン（Asn）について、イオントラップ型LC/MS/MS

およびCE/MS/MSを用いた定量法を確立し、AA生成挙動を研究したもの。定量のため安定同位体（Asn-d<sub>3</sub>）を合成し内部標準物質として使用していることが一つの大きな特徴であり、合成を含めた手間のかかる詳細な研究内容に感心した。

最後は、田中信男氏（京都工芸繊維大学）より、「モノリス型シリカキャピラリーカラムの特性と応用」と題して講演が行われた。モノリス型シリカカラムは従来の粒子充填型カラムと異なり、三次元ネットワーク状の骨格と空隙が一体となった構造を持ち、粒子充填型カラムより高速・高性能の分離を実現できる可能性がある。先生は、市販のモノリス型シリカロッドカラムとは調製法の異なるキャピラリーカラムを開発している。性能の限界も明らかとなってきたとのことではあるが、可能性を秘めた先端技術開発のお話であり、今後に大きな期待を抱かせる内容であった。

なお、例会終了後には新年会が開催され、例会出席者のほとんどがこの新年会にも参加して交流を深めた。講師を囲んで例会で時間の足りなかった議論の続きをしたり、会員相互の情報交換を行ったり、自由な雰囲気ですぐに親睦を深めることができて有意義であった。

〔榎クラレ 石井孝浩〕

### 先端計測分析技術・機器開発事業情報交換会

ご存じのとおり、平成16年度からJSTの先端計測分析技術・機器開発事業が始まった。平成16年度は522件から29件が採択されたが、日本分析化学会関係者からの提案は当初の期待ほどは採択されなかった。会員間で情報や経験を共有し、採択課題の優れた点を学び、それらを通じて平成17年度の申請に向けて新たな戦略を練る機会を提供するために、日本分析化学会主催で標記会合が2004年12月18日島津製作所東京支社で行われた。

平成16年度採択課題の事例紹介として、工学院大学の坂本哲夫氏が「収束イオンビーム/レーザーイオン化法による単一微粒子の履歴解析装置」について、また東京都立大学の伊永隆史氏が「非解離イオン化法全プロファイル分析標準計測装置」に関するプロジェクトの概要と採択に至るまでの経験を話された。いずれも、本事業が始まる前からプロジェクトの内容やチーム内の協力体制について綿密に検討されており、事業に合わせて拙速に構成されたプロジェクトではないことが明確に示された。事例紹介に引き続き、事業にかかわった方にも参加いただき、本事業に関する情報交換、パネルディスカッションが行われた。年末が近い土曜日ということもあり、参加者は30人余りであったが、東京周辺からだけでなく、遠方から出席された方も少なくなかった。採択プロジェクトの内容に圧倒されたとの意見もあったが、各自の新たなアイデアを再構築し、平成17年度のプロジェクト提案での健闘を誓い合った。

〔東京工業大学 岡田哲男〕